

# 【反戦の歌】戦時下の戦争批判

屋良健一郎

## 1. はじめに

一九四四年（昭和十九）に刊行された土屋文明『短歌小径』は短歌の入門書であるが、「支那事変及び大東亜戦争に於いて、国民的感激が此の短歌といふ形式によつて表現された實際を報告すると共に、短歌製作者の覚悟を明かに」（二頁）することを目的とする文章も少なからず収録されている。文明は、日中戦争や太平洋戦争を詠んだ歌、「わが国民の志気を励まし、覚悟を促す歌」（三四四頁）を紹介し、「かうした我々の民族的国民的感動を歌によつて言ひ表はすといふことは、現在よりもつともつと広く多くの方々によつて行つて頂きたい」（三四六頁）と読者に呼びかける。

論じられることは少ないように思う。本稿では、歌人たちがどのような形で戦争に抵抗し得たのか（あるいは、し得なかったのか）、見ていきたい。

## 2. 反戦の歌

反戦歌としては、プロレタリア歌人の作品が思い浮かぶ。プロレタリア短歌は、一九二〇年代後半から一九三〇年代前半に盛んに作られた。

- ・「演習終了まで耕作に手入れすべからず」のお達しよお蔭でまた畠行事の手遅れだ
- ・米田英一「戦旗」一九二九年十二月号
- ・沖合にいた漁師を人殺し演習中の砲弾が吹き飛ばしても憲兵隊は知らん顔してぞぞ！ 吠えろ！ 漁師！
- ・椎橋竹次『おれたちの歌』（一九三〇年）
- ・蚊の涙程のめくされ金と勳章くれたってそれで遺族が食えるかい、忠魂碑に反戦のピラをはりつけろ！

河野力『おれたちの歌』（一九三〇年）満洲をうのみにしても飽きたらぬおい等の国だよ愛想がつきらあ

坪野哲久『九月一日』（一九三〇年）

- ・非戦論者の俺の教室からも好戦論者は幾らでも産れる。今の教育制度

間須阿王「綴方生活」一九三六年二月号

一首目、演習場の近くの農地を詠んだ歌だろうか。二首目ともども、人々の生業よりも軍事演習が優先されることへの反発。三首目の率直な反戦歌も印象深い。

四首目の哲久作、満州事変が起きるよりも前の歌であるが、その後の日本による各地への侵略を予見したものとなっている。五首目、大陸では関東軍による華北工作が進み、抗日運動が盛んとなっており、国内では前年に国体明徴声明が出されていた、そんな時期の歌。戦争へと国家・国民が向かいつつある様子が窺える。